



環境経済・政策学会 ニュースレター

No.44

2020年2月29日発行

発行責任者：ニュースレター編集委員会委員長 中野牧子

1. 巻頭言：会長挨拶 (日引聡：東北大学)

2018～2019年度の会長職を今年3月末で退任させていただきます。皆様のご協力をいただきながら、理事会とともに2年間の任期を終えさせていただきますこと、厚くお礼申し上げます。退任に際し、今日までの取り組みと今後の期待について、私見を述べさせていただきます。

(1) 国際化の推進

前・赤尾会長の代から、韓国環境経済学会との交流が開始し、2018年から台湾・環境資源経済学会との交流が新たに加われました。それぞれの学会と、1年おきに互いの学会に会員を派遣する研究交流を始めました。これに伴い、昨年の大会では、常務理事会主催による日本・韓国・台湾3学会合同国際セッション(英語による発表)を2つ設け、6件の研究発表が行われました。今後も、お互いのレベルアップにつながる研究交流を継続していただければと願っています。特に、交流を通じて、研究議論を深めるだけでなく、共同研究に向けた取り組みが推進され、より実りある研究交流に発展してほしいと願っています。

また、今年度から一般セッションにおいて、正式に英語セッションを設置しました。プログラム委員会のご努力と皆様のご協力により、一般発表の全体の3分の1のセッション(9セッション)を英語セッションにし、企画セッションと合わせると、合計12の英語セッションを設けました。この結果、日本人による発表に加え、海外の研究者

目次

1. 巻頭寄稿文：会長挨拶
2. 学会からのお知らせ
 - (1) 環境経済・政策学会 学会賞候補者の公募
 - (2) 環境経済・政策学会 2020年大会について
3. 研究短信
 - (1) 海外の大学紹介：英国・ケンブリッジ大学
4. 新刊本紹介

の発表、日本で学ぶ留学生の研究発表が増え、より国際的な雰囲気の中での研究議論が可能となりました。日本の研究プレゼンスを高めていくために、現在、国際的な研究環境で活躍できる研究人材の育成が求められており、日本で学んだ若い研究者も、国際的な研究環境に身を置きながら、自らの研究を発表し、議論する能力が必要とされています。さらには、日本の大学で環境経済・政策研究を実施する留学生が増える中、日本語を話さない留学生に研究発表の機会を作り、優秀な人材を育成することも重要な課題の一つです。学会として、国際的に活躍する研究者の育成に貢献することは重要であると思います。今後も、国際的な研究環境の醸成、国際競争力のある研究者育成に資する活動の定着とさらなる展開を願っています。

(2) 若手研究者の育成

当学会では、毎年、若手研究者に対して奨励賞を授与しています。近年、国際的な学術誌に掲載されたレベルの高い論文が多く応募されるように

なり、若い研究者の研究力の目覚ましい向上を実感しています。しかし、若手研究者育成に関するいくつかの課題も残されています。現在、多くの大学で、環境経済・政策分野に関わる教員が配置され、多くの若い研究者が育成されていますが、大学院教育において、必ずしもシステマティックな教育プログラム（カリキュラム）が用意されていないため、個々の指導教員の努力によって若い人材が育成されています。教育には規模の経済が働くため、大学を超えて若い研究者を育成するようなプログラムを提示できれば、個々の教員による教育の二重投資が避けられ、より効果的な若手研究者の育成が可能になるのではないかと思います。その役割を担える可能性があるのが多様な研究者を抱える「学会」です。将来、大学院生を育成する教員が学会と連携しながらこの問題に取り組み、より優秀な人材育成につなげることができれば、「日本の研究力」を引き上げることができるのではないかと思います。

(3) 緊急性の高い研究課題への貢献を

近年、台風の大型化に伴って、自然災害は社会に大きな被害をもたらすようになってきています。コロナウィルスによる感染症の広がりも社会に対する大きな脅威となっています。このように、緊急性の高い問題の解決に貢献できる研究が必要とされています。研究のスタイルには、基礎的研究、応用研究といった違いや、理論研究、実証（定量的）研究などの違いがあるため、すべての研究者が緊急性の高い研究課題に関連する研究を行う必要はありません。しかし、研究の究極的な目標・使命が、人類と社会への貢献であるならば、環境分野において、緊急性の高い研究課題にチャレンジし、問題解決に貢献する研究者が、私たちの学会の会員の中から数多く出てきてほしいと願っています。

(4) 学際的な研究への取り組みを

環境経済・政策研究には、問題を生み出す社会の仕組みを理論的に明らかにするとともに、その解決策を具体的に提示する役割が求められています。このような中、社会科学と自然科学の研究者による学際的な研究が、近年国際社会において積極的に行われています。日本でもいくつかの研究機関がそのような研究を目指していますが、国際的な取り組みに比べると、必ずしも十分ではない状況にあると思います。今後、当学会の研究者が、より積極的に、自然科学分野の研究者との学際的な研究を展開し、国際的に意義の大きい研究成果を生み出していくことを期待しています。

今後の学会の発展を祈念しています。

2. 学会からのお知らせ

(1) 環境経済・政策学会 学会賞候補者の公募 (環境経済・政策学会会長 日引聡：東北大学)

下記要領で令和元年度の学会賞候補者を公募します。会員の皆様におかれましては、推薦をよろしく願います。なお、今年度より締め切りが早くなりましたので、ご注意ください。

(1) 学術賞は、従来、論文あるいは著書を対象に選考していたものから、過去10年間の研究業績の蓄積に対して選考することになり、賞の授与対象も、著作物から研究者に変更されました。

(2) 奨励賞については、「原則として40歳以下」という年齢条件が付加され、賞の授与対象も、著作物から研究者に変更されました。対象となる著作物は過去2年間に出版されたものに変更されました。

1. 学会賞の対象と資格

学術賞：優れた研究業績を挙げた者に授与する賞。前年12月末までの過去10年間に公表された研究業績（論文と著書）に基づいて評価される。

奨励賞：奨励に値する論文または著書を執筆した、原則として受賞年の4月1日時点で40歳以下の者に授与する賞。共著に基づき授与される場合、授与対象者は、その共著に対して主導的貢献を行ったものであることとする。共著論文の場合は、筆頭著者、或いは、責任著者であることとする。前年12月末までの過去2年間に公表された論文または著書を選考対象とする。

論壇賞：一般社会への積極的な問題提起や普及啓発の面で大きな貢献が認められる単行本、小冊子、総合雑誌等における著作に授与する賞。前年の12月末までの過去1年間に公表された論文あるいは著書を対象とする。

特別賞：本学会に顕著な貢献のあった会員に授与する賞。特別賞については、期間は限定しない。

なお、オンライン版が利用可能なジャーナルについては、オンライン版で掲載された時点で公表されたとみなします。

2. 応募方法

応募は他薦としますが、奨励賞のみ自薦も認めます。共同論文を奨励賞に推薦する場合、論文の共著者は推薦者にはなれません。また、推薦者および被推薦者は推薦の時点で本学会の会員でなければなりません。学会ウェブサイト (<http://www.seeps.org/html/prize/index.html>) に掲示する指定の推薦書に所定事項を記入し、選考論文または著書とともに、学会賞選考委員会事務局まで、電子メールに（論文はPDFの添付ファイル）より送付してください。ただし、著書については、2部郵送してください。なお、電子メールでの応募に際して、お送りいただいたメールが何らかのトラブルにより受け取れない場合がありますので、お送りいただいてから、事務局から返信のメールがない場合には、直接、下記までお問い合わせ

してください。

応募締め切り 令和2年3月25日（必着）

3. 問い合わせと送付先

環境経済・政策学会 学会賞選考委員会事務局
松本茂
青山学院大学経済学部
〒150-8366 東京都渋谷区 4-4-25 青山学院大学
8号館 828
Tel: 03-3409-9640
Email: shmatsumoto@aoyamagakuin.jp

(2) 環境経済・政策学会 2020年大会について (速報) (李秀澈：名城大学)

2020年大会は、2020年9月26日（土）・27日（日）に名城大学塩釜キャンパスで行われる予定です。大会前日の9月25日（金）には、大会実行委員会の企画として「環境エネルギー共同体としてのエネルギー環境政策協力」のテーマの下、プレカンファレンスが開催されます。

また常務理事会とプログラム委員会で議論が行われ、これまで若手研究者の発表が中心であった「ポスターセッション」を廃止し、その代わりに「Speed Talk」という討論者を付けない短めの口頭報告（報告10分+質疑5分、フルペーパーの提出義務なし）セッションを設置することとなりました。討論者付き口頭報告は従来通り実施いたします。これらについては、4月の正式の大会案内の際に改めてご案内させていただきます。皆様の御参加を大会実行委員一同お待ちしております。

大会実行委員

李秀澈（委員長）、伊藤しのぶ、籠橋一輝、喜多川進、北見宏介、笹尾俊明、佐々木健吾、爲近英恵、鶴見哲也、中田実、中野牧子、沼田大輔、東田明、藤川清史、渡邊聡

プログラム委員

岩田和之(委員長)、朝山慎一郎、有賀健高、井口衡、阪本浩章、澤田英司、庄子康、嶋田大作、杉野誠、高橋若菜、武田史郎、時松宏治、野田浩二、藤井秀道、溝渕健一、山上浩明

3. 研究短信

(1) 海外の大学紹介：英国・ケンブリッジ大学 (佐藤 真行：神戸大学)

2019年3月末から1年間、ケンブリッジ大学 Land Economy 学部で滞在研究いたしました。受け入れは、BioEcon カンファレンスの中心メンバーの一人であり、“Biodiversity Economics”などの書籍を著した Andreas Kontoleon 教授にお願いして、大変充実した一年を送ることができました(本原稿執筆時点であと2ヶ月弱ありますが)。

Land Economy 学部は学際的な研究に特徴があり、環境問題は都市計画と並んでこの学部のメインテーマです。私は主に C-EENRG (Centre for Environment, Energy and Natural Resource Governance) という部門で過ごしました。シナジーと読みます。とても機知に富んだネーミングで大変気に入っています。かなりアットホームな雰囲気(本当に家にいるみたいな感じでした)、非常に気さくに受け入れてもらえて様々な研究者と交流ができました。毎週木曜日の昼下がり開催されるセミナーは、研究発表のレベルが高く大きな刺激を受けました。毎回、教授の誰かがケーキなどを差し入れてくれ、紅茶やコーヒーとともに議論が弾みます。

Land Economy 学部はクイーンズカレッジの向かいに位置し、ケンブリッジ市内でも屈指の観光スポットの数学橋とパント乗り場の並びにあって、いつも観光客で賑わっています。また、隣の建物に入っている Existential Risk Centre は、パーサ・ダスグプタ先生が中心となって進めている一大プロジェクト、“The Economics of Biodiversity”(ダ

スグプタ・レビュー)の拠点です。安価に食事を取れるユニバーシティ・センターにも非常に近く、学生が多くて活気があります。目と鼻の先にあるケム川沿いのパブ“Anchor”は、こちらに来る前年の2018年にケンブリッジ大学で開催されたBioEcon 学会に参加した際に大沼あゆみ先生に連れて行ってもらった思い出の場所ですが、その時はまさかこんな近くに研究室をもらえて1年間研究することになるとは思ってもいませんでした。

今回は6歳、3歳、1歳の男児を含む家族連れでの滞在となり、日常生活も楽しく、大変よい経験になりました。家探しに苦戦することを覚悟していたのですが、運良く大学のアコモデーションに入れました。場所はウェスト・ケンブリッジという今まさに社運(学運?)をかけて開発しているエリアで、30人近いノーベル賞受賞者を輩出しているキャベンディッシュ研究所や、ビル・ゲイツ氏が寄付した計算機科学センターがあります。小学校や保育園、スーパーマーケットもあって我が家にとっては大変便利でした。ここから毎日自転車で15分くらいかけて通いました。途中に大学図書館や経済学部があり、気の向くままに立ち寄りしました。特に、経済学を学んだ身として、アルフレッド・マーシャル経済学図書館で勉強すると集中できる気がしました。気のせいかもしれませんが、こちらで知り合った先生から経済学部で月曜日に開催されるリーディング・セミナーに誘ってもらい、よく参加しました。毎回、重要な論文を書いた著者を外部から招いて解説と議論をします。招待者のなかには、Richard Tol 教授や Clóvis Cavalcanti 教授のようなビッグネームもしばしば登場しました。

休日は、イギリスの雰囲気を楽しみました。特に気に入ったのは、3kmほど離れたグランチェスターというところにあるティーガーデン“Orchard”です。ここは色々な先生に勧められて知ったのですが、素晴らしい庭を眺められる建物の壁一面にここを好んで通った訪問者の肖像が飾られていま

す。顔ぶれがものすごく、J.M.ケインズ、L.ヴィトゲンシュタイン、V.ウルフ、A.チューリングなど最高の知者たちが名を連ねています。私は S.ホーキング博士の肖像の前でお茶を飲みました。

ケンブリッジは学問の聖地のような街だと実感しました。また、伝統的でありながらも、新しい分野の開拓や異分野の融合への情熱が印象的でした。最近ではイギリス国内での競争、アメリカを始めとする諸外国との競争に苦戦している向きも指摘されますが、長年の歴史が作り上げたケンブリッジ大学の独特の雰囲気と底力は、そう簡単には廃れないと思います。

4. 新刊本紹介

ここ数カ月以内に出版された学会員の著書・編集本を紹介します。

『Human Dimensions of Wildlife Management in Japan: from Asia to the world』

著者：桜井良

出版社：Springer

出版年月：2019年6月

概要：本書は Human Dimensions of Wildlife Management：野生動物管理における社会的側面（ヒューマンディメンション、以下 HD）に関する著者の研究成果をまとめている。HD は野生動物管理を円滑に進めるための社会科学的アプローチで、問題解決を目的とした実学的研究（例：地域住民や利害関係者への意識調査及びそれらを反映させた政策の提案）を指す。HD 研究は 1960 年代から米国を中心に行われ、現在では国際学術雑誌の発行、国際学会の定期開催などがなされている。本書では（1）HD の概念や海外における研究の現状、（2）日本の野生動物管理の歴史や関連する先行研究、（3）兵庫県のツキノワグマ管理及び栃木県の住民参加型獣害対策事業における HD 研究、（4）人々の野生動物に対する意識を視覚的に示す Potential for Conflict Index など、米国で開発され

たツールの日本における応用可能性についてなどを記している。

まだまだ発展途上の研究であり、皆様からご指導ご鞭撻を頂きながら、進展をはかってまいります。

『Energy, Environmental and Economic Sustainability in East Asia: Policies and Institutional Reforms』

編著者：Soocheol Lee, Hector Pollitt, Kiyoshi Fujikawa

出版社：Routledge

出版日：2019年10月

概要：本書は、日本・中国・韓国・台湾を中心とする東アジアの持続可能な未来に向けたエネルギー・環境・資源利用関連制度改革の方向性を明らかにすることを目的としました。その際に本書は、各国のパリ協定 2°C 目標達成のための環境・エネルギー・資源政策が、2050 年までの中長期的に環境と経済に与える影響評価を、E3ME マクロ計量経済モデルと FTT ボトムアップ技術選択モデルにより、定量的に評価し、関連制度改革の当為性を評価する尺度として活用しました。本書のこうした目標達成のために、下記の 3 つのサブテーマに分けて考察を行いました。

Part 1 – Improving power sectors toward sustainable low carbon economy across East Asia
Part 2 – Industry transition, transportation system and sustainable low carbon economy across East Asia
Part 3 – Transition of materials, water and local pollution for environmental sustainability

+++++

皆様の投稿をお待ちしています！

環境経済・政策学会ニュースレター 投稿規定簡易版

1. 【投稿資格】環境経済・政策学会員に限ります。
2. 【投稿記事の種類】（1）提言、（2）研究短信、（3）

要望、(4)新刊紹介の4種類です。

3. 【記事の長さ・書式等】上記(1)～(3)1つの記事は、原則として1500字以内とします。(4)概要は原則として400字以内とします。

4. 【記事の送付】下記の編集委員会宛に、電子メールでの添付ファイルとして送付してください。

問い合わせ及び記事の送付先：

〒464-8601 愛知県名古屋市千種区不老町 名古屋大学・環境学研究科・准教授 中野牧子 E-mail: nakano-m@cc.nagoya-u.ac.jp

+++++

編集後記

今月号をもちまして、編集委員長を交代することとなりました。原稿執筆者の方々や他の編集委員の方々にご協力いただき、今日まで編集委員長を務めることができました。また読者の方からも感想をいただくことがあり、励みになりました。ここにお礼申し上げます。今後は読者としてニュースレターに関わっていきたく存じます。(M.N.)

編集

環境経済・政策学会ニュースレター編集委員会

中野 牧子 (編集委員長)
齊藤 崇
関 耕平
鶴見 哲也

発行

環境経済・政策学会

(Society for Environmental Economics and Policy Studies)

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町194-502

学協会サポートセンター内 環境経済・政策学会事務局

電話：045-671-1525 ファックス：045-671-1935